

八木健に学ぶ滑稽俳句 9

高橋 素子

目出度さもちう位なりおらが春 小林一茶

初夢のつづきは獺に喰はれけり 八木健

二〇一四年の年が明けたと思っていたら、もう二月。月日の流れが年々早くなっていく。それも今やいち日、ひと月が駆け足状態である。去年の「天声人語」によれば、大人になると加齢で代謝も鈍り、心躍るイベントも減って、「心の時計」は緩慢になり、実際の時の流れを早く感じる様になるという。

掲出の有名な一茶の句は、「おらが春」の巻頭に
這へ笑へ二つになるぞけさからは と、初めて正月を迎える長女さとを詠んだ一句とともに収められている。「ちゅう位」は本来、中程度の意であるが、ここでは、やっと手に入れたつかの間の満ち足りた思いを信濃の方言を用いて、新年を迎える喜びも、老い先の知れた身には、まあいい加減なものだが、おれには相応しいと詠んでいる。

師・八木健の句は、折角の素晴らしい初夢の続きをもっと見たかったのに、獺に喰われてしまったと、嘆いている。

本物の獺は、ずんぐりした犀の様な体で、吻が突き出たウマ目バク科の哺乳類。アメリカバク以外は、絶滅の危機にあるらしい。我が国では、夢なら何でも食べる想像上の動物として有名であるが・・・中国では、体は熊

に、鼻は象に、目は犀に、尾は牛に、脚は虎に似て、人の悪夢を食うと伝えられているらしい。

師・八木健に「二月」の兼題で滑稽句をお願いしてみる。

さむらひの西向く月のはじめ哉 八木健

おしまひを端折つて逃げる二月かな 八木健

逃げ去りし二月の尻尾手に残る 八木健

流石に上手い。師を手本に私も詠んでみる。

二ん月や尻に帆掛けて逃げ行ける 素子

今回も古今の名句と師・八木健の句の比較により、滑稽句の学習を深めていきたい。

嫁が君この家の勝手知りつくし 轡田進

嫁が君里帰りしてそれつきり 八木健

「嫁が君」は正月三が日の鼠のこと。普段は家中駆け回ってものを齧り嫌われている鼠も、大黒様の使いとして、米や餅を供えるなど、正月にもてなす風習は広く行われていた。

掲出の二句は、普段嫌われ者の鼠も「嫁が君」と呼ぶ事により擬人化され、こまめに働くお嫁さんや里帰りして帰って来ないお嫁さんを想像して、親しみさえ覚え笑えてくる。二句ともに、素晴らしい滑稽句の名句となっている。

俎に薺のあとの匂ひかな

内藤鳴雪

ばあちゃんのななくさなづなのすといとんとん 八木健

正月七日に、春の七草（芹・薺・御形・繁縷・仏座・菰・蘿蔔）を入れて炊いた粥、七種粥を食べる習慣があるが、後には、薺（ぺんぺん草）または油菜のみを用いた菜粥も食べられたように、薺がその中心であった。そうして、一年の無病息災を願い、右手に包丁、左手に杓子を持って、俎に載せた若菜を囃しながら叩く習俗は「薺打つ」・「七草の囃し」と言われ、新年の季語である。

掲出の鳴雪の句は、俎の上に残った薺のほのかな香りから、早くも感じる春の訪れの喜びを詠んで名句となった。

師・八木健の句は、「唐土の鳥が日本の土地へ渡らぬ先にななくさなづな…」など唱え囃しながら、家族の無病息災を祈り、若菜を叩く祖母の姿を、俎の調子よい音で表現して、滑稽句の佳句となっている。

目には青葉山ほととぎす初鰹

山口素堂

初鰹どんと俎板おしつぶす

八木健

胃袋の用意万端初鰯

八木健

素堂の句は、「青葉」・「山ほととぎす」・「初鰯」という三つの初夏の季語を持ち、そこに全て〈切れ〉を持つ。青葉とほととぎすは、古歌に多く詠まれているが、「かまくらにて」の前書きがあるので、そこに更に鎌倉名物鰯を登場させて、鎌倉の初夏はなんと素晴らしいのだと、挨拶句を詠んでいる。季語と言い、句切れと言い、初心者には禁じ手であるが、同季の名詞を羅列しただけの奇抜な句法が当時の好尚にかなったものであろうか、素堂なるが故の名句となった。

陰暦四月頃、一番早くとれる走りの鰯は美味で珍重されるが、師・八木健は脂が乗った初鰯を目に見える形で写生している。今正に料理されんとしている俎板上の丸まるとした初鰯は、俎板に寄せられているというよりも、むしろそのぴちぴち跳ねそうな巨体で、どんと俎板を押しつぶしているかの様にさえみえると、師は詠んでいる。その美味しそうな初鰯を見ると、早く食べたくて、口に涎、お腹が鳴る程、胃袋の用意はすでに万端だと、面白く詠んで滑稽句の佳句となった。